

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010 年度～2012 年度

課題番号：22530828

研究課題名（和文）美術教育における性差の研究 -男女の特性を活かす教育の構築に向けて-

研究課題名（英文）Gender Difference Study in Art Education

Constructing Education to Make the Most of Gender Characteristics

研究代表者

宇佐美 明子 (USAMI AKIKO)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：10286437

研究成果の概要（和文）：多くの美術教育者にとって大きな影響力を持つ、ローウェンフェルドやチゼックなどの大著には、男女のデータを合算し平均化することで、その特徴が見えない例や、女兒の特徴である色面による表現(塗り絵など)を批判する記述があった。研究の礎となる性差研究のデータベース化は、今後も継続する。HP 上には信頼のおけるデータを随時掲載し一般に広く意見を求めており、学習指導等の改善につなげていきたい。

研究成果の概要（英文）：Viktor Lowenfeld and Franz Cizek who have influenced many art educators state in their work that combining and averaging male and female data blurs its distinction and also criticize female characteristics of coloring on a surface (such as coloring).

More information to support the gender study is necessary and it will be continued. We periodically post reliable data on our web site and request for reader's feedback. We hope to utilize it to improve study curriculums and other areas.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
23 年度	600,000	180,000	780,000
24 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：性差研究・美術教育・学習指導論・教育学・芸術諸学

1. 研究開始当初の背景

男女の表現の違いについては、すでに約 90 年前、美術教育研究者である関衛によって綿密な調査が行われ、その報告が大著『普通教育に於ける芸術的陶冶』（東京同文館 1921 年）に収録されている。大正から昭和の初期にかけて「性差」は身体的・先天的なものとして受容され、性差に配慮した教育が行われた。そして昭和 20 年以降、台頭した男女平等思

想を背景に「性差」の解釈が大きく変わっていく。例えば、1997 年出版の論文集『美術とジェンダー』（美術史におけるジェンダー研究 11 編.ブリュッケ社）では、基本的に男女の差異は生来のものでなく、歴史的、社会的、文化的に作られたという前提で各論が展開される。しかし一方で、男女児の表現の違いが、大脳生理学など基礎医学の分野で取り上げられ、研究の土台となる重要な資料とし

て扱われている。1996年、協力者皆本二三江や、有阪治、新井康允の「幼児画にみられる男女差」(『Brain Medical Vol.8 No.3』特集・脳の男女差)では、(子どもの絵画表現に男女で違いが認められるということは、物の捉え方や情報処理の仕方に男女の違いがあることを意味している)としており、また、国際的な学会誌である *Hormons and Behavior* 40(2001)では、皆本二三江、飯島恵、有阪治、新井康允が“Sex Differences in Children’s Free Drawings: A Study on Girls with Congenital Adrenal Hyperplasia”「児童の自由画における性差:先天性副腎皮質過形成の女の子に関する研究」の中で、男女児童の表現の違いを前提とした研究発表がなされている。

2. 研究の目的

男女児(5,6歳児)の絵画表現には、モチーフ、構図、色彩などに大きな違いが見られる。男児は人工物で女児は人物が主なモチーフであり、男児の構図は多様で女児は横並べ型並列構図に集中している。男児は強烈な配色で自己主張し、女児の画面は高明度色同士を配し、明るく柔らかな印象を与える。その他、男児は線でリアルさを求め、女児は色面で絵空ごとを描く。また、女児は装飾にこだわり「かわいい」に価値をおき、男児は装飾欲求が乏しく「強く、かっこいい」ことに意味を見出す。これらの特徴は皆本により「造形教育事典」に6ページにわたり明記されているが、一般には知られていないだろう。

幼稚園・小学校などの教育機関をはじめ家庭教育においても、男女は変わらないという大雑把な平等意識が今だ根強く残っており、教師の性による好みで教材が決定され評価されるといった例を生んでいる。男女は等しく大切にされなければならない存在であるが、同じような表現特徴を有するものではないのである。

このように男女の美術表現に違いがあるにもかかわらず、それに適した学習方法が確立されていないことに着目し、本研究では、男女の性差を認め合い補完し合うような、新しい美術教育の基礎を築くことを目指している。なお、この性差研究は男女に優劣をつけるのではなく、それぞれの表現特性を活かす美術教育の構築のためにある。

3. 研究の方法

(1)性差に関する先行研究をデータベース化する。国内外の美術教育に関する性差研究を収集、翻訳などし、その概要をまとめ、色、形、構図などのキーワード別に分類する。また、性による表現特徴について、本研究と矛盾する記述がある場合、その箇所を抜き出し、検討する。

(2)世界的な影響力をもつ文献の中にも、著者の視点が性的特徴に支配されている場合や、データを男女別にしないことで偏った記述がなされている例がある。その箇所を抜き出し、同じデータを違う切り口から考察するなどして新たな視座を見出す。

(3)幼児期から児童期の子どもたちを対象とした、表現活動と図画工作科の授業の事例から、男女の表現(価値観)の違いにより生じる教育内容の不具合を、教育者と子ども双方の視点から見直す。

また、0歳から6歳までの自由画を収集し、皆本のデータと比較検討する。

(4)研究成果は、学会発表、共著の出版、ホームページの開設、講演会、研究会などを通して公表する。

4. 研究成果

(1)主に国内で発表された論文や文献を収集し、その概要をまとめ、あわせて色や形、構図などのキーワードによる分類もすすめている。性差研究のデータベース化は今後も継続する。国外のデータは、翻訳が遅れている。

(2)V. ローウエンフェルド、R. ケログラの著書では、描いた子どもの年齢を記述していても性差には触れていない。むしろ、男女のデータを合算し平均化することで、その特徴が見えなくなる例や、女児の特徴である色面による表現(塗り絵など)を批判する記述があった。

W. ヴィオラによる『チゼックの美術教育』十章には、123「男女では違いがない」、126「少女ではいわゆる悪い色を使う」、219「きちんとしていること」、269「ユーモラスでないのは、おとなしいから」や、白黒や模様に対する考え方などに、性的特徴を明らかにすることを支持しない姿勢や、研究者が男性であるための偏った記述ではないかと推測される部分がある。

(3)図画工作科の授業事例を分析していくなかで、グループワークのぎこちなさに着目し「男女混合のグループワークは結果として何を求めているのか」を課題として研究をすすめていくこととした。

国立音楽大学研究紀要第43集(2008年)に掲載した「教育する側とされる側の性差を熟慮した教育内容の見直しの必要性について幼児期と児童期にみられる男女の表現特徴の比較から」では、小学校6年生がそれぞれに愛着のあるものを持ち寄り、男女混合のグループワークにより意見交換などをする授業を対象にしている。授業のねらいの一つと

して、自分とは違う価値基準を持つ「他者を理解する」があった。このような男女混合のグループワークを実施している授業を観察するたびに、果たして男女混合にすることで、何が育つのかを、十分にシミュレーションできているのかと考えさせられる。性差を理解することも他者を理解することである。

0歳から6歳までの自由画606枚を収集し、一画面上に使用される色数、クレヨンの使用量などを調査・分析した結果、女兒は男児よりも、一画面上に使用する色数が多く、皆本が約30年前に幾度も追試した結果と変わらないことが分かった。

(4)研究成果の公表は、2010年度：美術科教育学会での口頭発表「男女の特性を活かす美術教育の構築に向けて」。研究分担者と協力者全員による雑誌への投稿「子どもと色の世界」。2011年度：東京藝術大学美術研究会の論文集に投稿「性差を熟慮した美術教育の必要性について」。他、学会発表などで、研究の経過報告を行った。2012年度：HPを開設し、データベースの一部を掲載し、それに対する一般の声を広く収集している。

三か年の研究記録は、冊子としてまとめる予定であったが2012年度内には完成しなかった。内容は、分担者・協力者による論文と、研究分担者と協力者による例会で討論され、提起された諸問題とその研究について、そして分類の完成したデータベースの一部を掲載する予定である。

[論文]

宇佐美明子：「男女混合のグループワークは結果として何を求めているのか」

小学校の研究授業で男女混合のグループワークのぎこちなさに注目した。共学での学習効果、男女別での学習効果についての先行研究を元に、男女混合のグループワークについて書き進めている。

また、上村松園は女性特有の美意識を極めるとともに男性的で大胆な構図も併せ持つ。一流とされる女流作家の作風からも共学における学びの在り方を探りたい。

島田由紀子：「チェコ共和国の子どもの描画表現にみられる性差の特徴」

女兒の色彩への関心の高さやモチーフの種類などは、日本とチェコの環境の違いに関係なく共通しているとし、性ごとの特徴を捉え、性差に応じた指導や援助について考えていく必要があるとしている。

中村るい：「古代ギリシャの女性芸術家」

女性の表現にとって目標となるべきものを探るため、古代ギリシャの女性芸術家の分析を試みている。

皆本二三江：「愛された『女絵』たち - 幼児から成人まで -」

女性の表現は時代を越えて普遍的であり、優雅さや気品は、男性の表現と比較するなどして優劣をつけるものではないとしている。

[例会で検討された諸問題]

研究分担者や協力者の討論の場である例会で、話題になりながら積み残してきた様々な課題を記している。この中には性による表現等の特徴が正当に評価されていない事例、研究者・教育者の視点が偏っている事例など、多岐にわたっている。これら、論文として形を成すまでに至らなかったものについても、研究を継続するとともに、HPに掲載し発信するなどして、解決の糸口を探っていく。

以下、提案された課題の一部を掲載する。

(1) 評価に関する課題

学校教育の場で、各教師の性による評価の偏りについてのデータ収集が困難であることから、コンクール作品の評価者の性と、その基準について調査している。

例会での報告に、以下の事例がある。「用途のある立体作品の審査で顕著な事例だが、様々に趣向をこらし機能性に力を注ぐのが男子の作品で、女子の作品は色彩と装飾に心を砕いている。男性審査員は男子作品の機能性を正確に判断しているように見受けるが、一方女子の作品の多くがそうであるカラフルで可愛い作品から、より美しい作品を選ぶのは苦手な傾向がある。女性審査員は女子のカラフルでどれもが均一に見える作品群の中から、優美さや品位に欠けるモノを見つけ出すことができる。一方男子の機能性を重視した作品の内容については、正確に審査しているという実感が持てないでいる。」

今後は、児童画のコンクール入選作品に対する書評から、審査員の評価基準の性差を探ることとした。

(2) 描画指導法に関する課題

利用者の多い代表的な描画指導法、酒井式とキミコ式の見直しをしたところ、酒井式は動きや構図など、キミコ式は色彩(色面)を重視する女性の特徴が反映されており、これらの描画方法を実践する場合、教師が性差を理解して指導する必要があることが分かった。

また、指導法の開発者の性が、その内容に影響を及ぼしているとも考えられる。

酒井式の授業を受けた女子にとっては、ダイナミックな構図で描く経験となり、男子にとっては自分の描きたかった動きや強さを実現できた喜びを感じるかもしれない。キミコ式では女子の色彩への興味を満足させるだけではなく、紙面に収めねばならないとい

った構図への不安を取り除いてくれる。彩色へのコンプレックスを抱える男子にとって、白と三原色（赤，青，黄）の4色の絵具の混色から、色彩との関わりが生まれるだろう。

(3) 研究者、教育者の興味関心に関する課題

研究者や教育者の多くは、子どもの表現には男女それぞれに特徴があることを知っているが、評価や教材選択に自分の性（興味関心の持ち方）が影響していることを認めない。そこで、美術教育系の学会誌などを対象に、研究テーマのキーワードを男女別に集計し、無自覚に選択されたテーマ（興味）の違いについて数値化することを試みた。

美術科教育学会と日本保育学会の学会誌から、研究テーマを分析した。キーワードは女性よりのテーマとして「色」、男性よりとして「形」、塗り絵とともに創造的でないとされている「まね、模倣」の3種類である。結果として明らかな性差は見られなかった。

原因は、男女混合の共同研究では、性別に分類ができなかったこと、テーマだけでなく、内容もチェックする必要があるなどである。

(4) 美術系受験予備校や画塾での評価と指導法についての課題

未来の美術（教育）を担う若者たちの価値観を左右する、美術系予備校や画塾などの指導や評価に、教師の性による偏りがないか。

例会での報告では「美術系受験予備校や画塾で評価されるに女子学生は、上村松園のように、男女の表現の優れた点をうまく融合させた者ではないか。美術界への登竜門である受験は、男性の美意識が強く反映していると考えられる。」という意見であった。

美術大学の学生は、決して一般の男女の特徴を有してはいない。むしろ逆転している学生もいるだろう。しかし、受験を通して男性の美意識を身につけた女子学生は多いはずである。

この点について聞き取りを試みたが、専門性が高いほど分析が困難であった。

以下、聞き取りの一部を掲載する。「日本画、彫刻などの分野の違いによって、デッサンに求められるものも異なるが、石膏鉛筆デッサンでは、石膏の白く光る微妙な濃淡が美しく、女子学生の多くはこの色の変化を追う。しかし、構図や塊としての力強さを求める男性指導者のもと、汚れてしまったと感じるほど黒々とした画面を作ることになる。なめらかなハーフトーンでなくても塊としての力強さがあれば評価されていた。」

「平面構成や立体構成でも、しっかりとした構図と粗密（主張）のあるデザインの実現が求められた。」

モチーフも色彩も画面上に等価分散することで、優美で平和な画面を構成する女兒

の特徴について前述したが、成人してもその美意識はほとんど変わらない。予備校で求められるものが自分の美意識と違うと感じる女子学生は少なくないだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

①宇佐美明子、性差を熟慮した美術教育の必要性について、美術教育研究、査読有、No.17/2011、2012、pp.37-44

②島田由紀子、幼児の見立て-図形からの描画発達と性差-、美術教育学、査読有、第32号、2011、pp.173-184

③宇佐美明子、中村るい、島田由紀子、勝浦クック範子、郡司明子、岡照幸、子どもと色の世界、小児歯科臨床、査読無、第15巻第12号、2000、pp.9-53

〔学会発表〕（計9件）

①宇佐美明子、中村るい、島田由紀子、男女の特性を活かす美術教育の構築に向けて、美術教育学会、査読無、第33回、2011

〔その他〕

ホームページ等

美術教育における性差の研究

<https://sites.google.com/a/kunitachi.ac.jp/kcmart/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇佐美 明子 (USAMI AKIKO)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：10286437

(2) 研究分担者

中村 るい (NAKAMURA RUI)

国立音楽大学・音楽学部・非常勤講師

研究者番号：50535276

島田 由紀子 (SHIMADA YUKIKO)

和洋女子大学・人文学群・准教授

研究者番号：80369397

(3) 連携研究者

皆本二三江 (MINAMOTO FUMIE)

武蔵野大学・名誉教授

勝浦範子 (KATSUURI NORIKO)

國學院大學栃木短期大学・人間教育学科・教授

郡司明子 GUNJI AKIKO)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：00610651

岡照幸 (OKA TERUYUKI)

国立音楽大学附属小学校教諭